

自己概念の明確性および自尊感情が 精神的健康状態の変動性に及ぼす影響

The Impact of Self-Concept Clarity and Self-Esteem on the Stability of Mental-Health

徳永 侑子・堀内 孝

TOKUNAGA, Yuko · HORIUCHI, Takashi

自己概念の明確性 (Self-concept clarity) は自己概念の内容や自己に対する信念が明瞭に確信を持って定義され、通時的に安定し、内的一貫性を保っている程度を表す概念である (Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Levallee, & Lehman, 1996)。また、自己概念の明確性は、自己知識の統合度の高さを表す指標の一つとみなされており (Campbell, Assanand, & Paula, 2003)、抑うつや不安、神経症傾向といった精神症状と負の相関を持つことや、ストレスに対する緩衝効果を持つことが明らかにされている (Bigler, Neimeyer, & Brown, 2001; Campbell et al., 1996; Campbell, Assanand, & DiPaula, 2003; Smith, Wethington, & Zhan, 1996)。このことから、自己概念が明確な人は、精神的な健康度が高いことが予測される。

自己概念の明確性は、自尊感情に関する研究の文脈の中で提出された概念である。Campbell (1990) は、特性形容語評定課題において、自尊感情の低い人ほど中点に近い曖昧な評定を行う傾向があり、評定に対する確信度および評定の通時的安定性が低く、一貫性が乏しいことを報告している。この結果は、自己概念の内容の肯定性を表す自尊感情が、自己概念の構造の明確性と関連することを示すものである。また、その後作成された自己概念の明確性尺度 (Self-concept Clarity scale) を用いた検討により、自己概念の明確性が自尊感情と比較的強い正の相関 (.60-.67) を持つことが確認されている (Campbell et al., 1996)。これらの結果から、自己概念の明確性が高い人ほど、自尊感情が高く、自分自身を肯定的に評価していると考えられる。

自己概念の明確性と同様に、自己評価の好ましさを表す自尊感情も抑うつや不安等の精神症状との間に高い負の相関が見られることが多くの研究において確認されており (Epstein, 1985; Tennen, & Herzberger, 1987)、心理的な適応の指標として用いられることも多い (小塩, 1998)。しかしながら、自尊感情との共変関係を統制した場合に、自己概念の明確性がこれらの指標に対して独自の影響力を持つか否かという点にまで踏み込んだ研究は少ない。また、自己概念の統合度の指標である自己概念の明確性と、自己評価の肯定性を表す自尊感情は高く相関するものの、理論上は別個の構成概念である。このことから、自己概念の明確性および自尊感情が、それぞれ異なる精神症状と関連する可能性が考えられるが、先行研究は自己概念の明確性を独立変数、自尊感情を従属変数とした検討 (e.

g., Campbell, Assanand, & DiPaula, 2003) や、これら二変数を独立変数として抑うつやポジティブ・ネガティブ気分を説明する検討 (e.g., Nezelk & Plesko, 2001; Lee-Flynn, Pomaki, DeLongis, Biesanz, Puterman, 2011) に留まっており、様々な症状ごとの両概念との関連の仕方の相異を比較検討するような研究は未だ行われていない。この点を明らかにすることは、各精神症状の発症プロセスの解明や治療法の考案において重要な示唆をもたらす可能性がある。そこで徳永・堀内 (2012a) は自己概念の明確性と自尊感情、精神症状を同時に測定し、自己概念の明確性と自尊感情がそれぞれの精神症状 (GHQ28; 指標の詳細は次項を参照) に関連するのかが検討した。その結果、自己概念の明確性は「身体的症状」や「不安・不眠」に対して、自尊感情は「社会的活動障害」に対して独自の影響を及ぼすことが確認された。

本研究では、徳永・堀内 (2012a) を発展させ、精神的健康状態の変動性に対して、自己概念の明確性および自尊感情がどのような影響を及ぼしているかを検討することを目的とする。自己概念の変動のしやすさと精神的健康状態の変動のしやすさが関連しているとすれば、自己概念の明確性が低く自己概念が不安定な人ほど、精神的健康状態の変動の幅が大きくなると考えられる。そこで本研究では、1カ月の期間を挟んで縦断的な調査を行い、自己概念の明確性、自尊感情を独立変数、精神症状の個人内変動の幅を従属変数とした検討を行う。

方 法

調査協力者 一回目の調査を2011年11月、二回目の調査を2011年12月に実施した。岡山県の大学の学部学生を対象とし、一回目の調査には309名、二回目の調査には314名が参加した。このうち、二回の調査において不備の無い回答が得られた239名 (女性151名、男性88名、有効回答率77%) を分析対象者とした。平均年齢は19.74歳 ($SD = 1.31$) であった。

手続き 講義の時間を利用して質問冊子を一斉配布し、時間内に回収した。個人内の得点の変動を検討するため、同じ講義の中で、一ヶ月の期間を挟んで二度に渡って同じ内容の質問紙調査を行った。また、携帯電話の電話番号の下4桁の記述を求め、同一協力者の二回分の回答を照合する際に利用した。

調査内容 以下の尺度項目への回答を求めた。

自己概念の明確性 邦訳版自己概念の明確性尺度を用いた。“1. 全く当てはまらない”から“5. かなりあてはまる”の5段階で評定を求めた。

自尊感情 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale) の山本・松井・山成 (1982) による日本語版を用いた。1因子構造で10項目から構成される。自己概念の明確性尺度同様、5段階で評定を求めた。

GHQ28 日本語版GHQ (General Health Questionnaire) のうち短縮版であるGHQ28を用いた。この尺度はGoldberg & Hillier (1979) に作成されたGHQの中川・大坊 (1985) による日本語版である。

GHQは主として神経症者の症状把握、評価および発見に極めて有効な Screening Test で、主たる内容は健常な精神的機能が持続できているかどうか、あるいは患者、被験者を苦悩させるような新しい事実が出現しているかどうかの質問項目である。本研究で使用したGHQ28は、GHQを因子分析し、その結果に基づいて作成された短縮版であり、“身体的症状 (Somatic Symptoms) ”、“不安や不眠 (Anxiety and Insomnia) ”、“社会的活動障害 (Social Dysfunction) ”、“うつ傾向 (Severe Depression) ”の四つの下位尺度から構成される。“よかった、いつもと変わらなかった、悪かった、非常に悪かった”といった項目ごとに異なる四つの選択肢に対して、最も当てはまるものを選択するよう求めた。採点はリッカート採点法に従い、選択肢の左から順に0、1、2、3点の重みをつけ、得点を算出した。

結 果

GHQ28の変動得点の算出 「身体的症状」、「不安と不眠」、「社会的活動障害」、「うつ傾向」の4つの下位因子ごとに個人の合計得点を一回目と二回目に分けて算出し、 z 変換を行った。さらに二回の z 得点間の差の平方を求め、各因子の変動得点とした。

自己概念の明確性とGHQ28の変動得点の相関係数 自己概念の明確性とGHQ28の各因子の変動得点との相関係数を算出した (Table 1)。その結果、自己概念の明確性と、「うつ傾向」との間に低い負の相関 ($r = -.21, p < .01$) 「社会的活動障害」の変動得点との間に有意傾向の低い負の相関 ($r = -.13, p < .10$) が見られた。自尊感情はいずれの変動得点との間にも相関が見られなかった。

共分散構造分析 上記の結果を基に、Amos18.0を用いてパスモデルの作成を試みたところ、適合度の高いモデルが得られた (Figure 1)。

この結果より、自己概念の明確性が低い人ほど、精神的健康の「社会的活動障害」および「うつ状態」の変動性が高くなることが示された。

Table 1 自己概念の明確性、自尊感情とGHQ28の変動得点の相関係数

	1 自己概念の 明確性	2 自尊感情	GHQ28(変動得点)			
			3 身体症状	4 不安と 不眠	5 社会的 活動障害	6 うつ傾向
2	.42 **	—				
3	-.06	-.08	—			
4	-.05	.02	.35 **	—		
5	-.13 †	.10	-.04	.17 *	—	
6	-.21 **	.01	.35 **	.28 **	.25 **	—

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

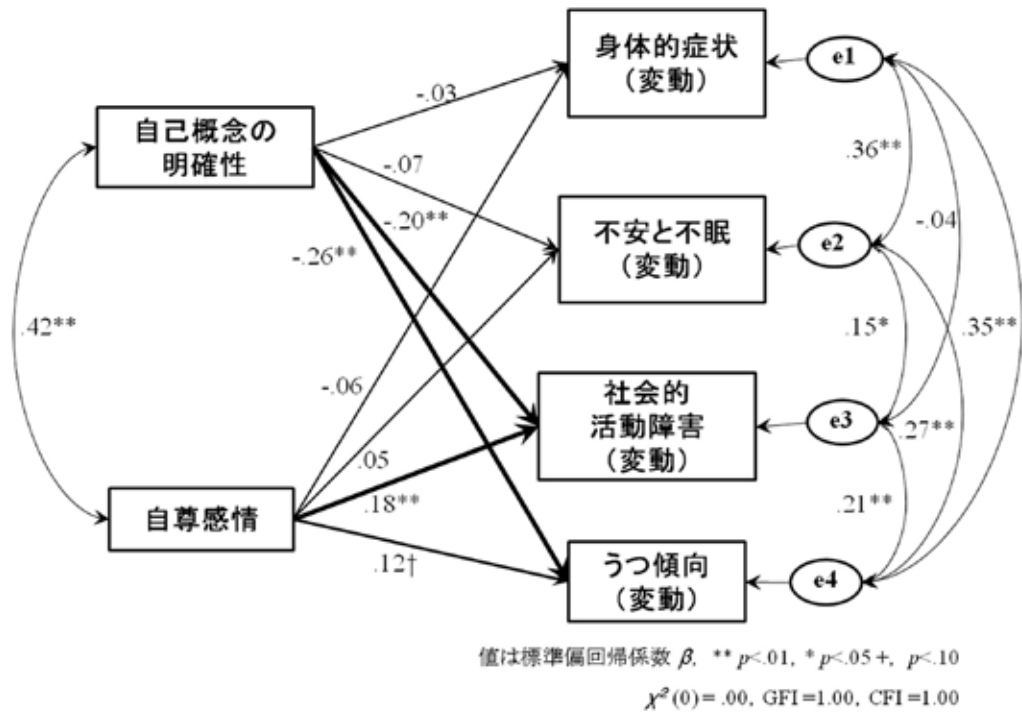


Figure 1 自己概念の明確性と自尊感情、精神的健康の変動のパス解析

考 察

本研究の目的は自己概念の明確性と自尊感情が精神的健康状態の変動性に及ぼす影響を検討することであった。相関分析の結果、自己概念の明確性とGHQ28の「うつ傾向」および「社会的活動障害」の変動得点との間に有意な負の相関が得られ、共分散構造分析においても自己概念の明確性からこれらの変動得点へのパス係数が有意となった。一方で、自尊感情はいずれの変動得点の間にも関連が見られなかった。

この結果より、自己概念の明確性の低い人は高い人に比べて、「うつ傾向」および「社会的活動障害」の二側面において状態が変動しやすいことが示された。Lee-Flynn, et al., (2011) は自己概念の明確性の低さが二年後の抑うつ症状の悪化を予測することを報告しており、このことから、自己概念の明確性は特に抑うつ症状の変動のしやすさを予測する要因となることが予測される。また、本研究から示唆しているのは、自己概念の明確性が低い人の方が一ヶ月後に状態が悪化する可能性のみならず、好転する可能性も高いという点である。この点においては、臨床群を対象とし期間や回数を増やした縦断調査を行うといった、さらなる検討を行うことにより、新たな洞察が得られる可能性がある。加えて、本研究で扱っているのはあくまでも主観的な自己概念の明確性および精神的健康状態であるため、他者評定や生理指標といった客観指標を用いた検討も望まれる。

引用文献

- Bigler, M., Neimeyer, J.G., & Brown, E., (2001). The divided self revisited : Effects of self-concept clarity and self-concept differentiation on psychological adjustment. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **20**, 396-415.
- Campbell, J. D. (1990). Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 538-549.
- Campbell, J. D., Assanand, S., & DiPaula, A. (2003). The structure of the self-concept and its relation to psychological adjustment. *Journal of Personality*, **71**, 115-140
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I.M., Lavalley, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity : Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 141-156
- Epstein, S. (1985). Anxiety, arousal, and the self-concept. *Issues in Mental Health Nursing*, **57**, 265-305.
- Goldberg, D. P., & Hillier, V. F. (1979). A scaled version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine*, **9**, 139-145.
- Lee-Flynn SC, Pomaki G, DeLongis A, Biesanz JC, Puterman E. (2011) Daily cognitive appraisals, daily affect, and long-term depressive symptoms: the role of self-esteem and self-concept clarity in the stress process. *Personality and Social Psychology Bulletin* **37** (2) 255-268
- Nezelk, J. B., & Plesko, R. M. (2001). Day-to-Day relationships among Self-concept clarity, Self-esteem, Dayly events, and Mood. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 201-211.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本語版GHQ 健康調査票 (手引) 日本文化科学社
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. NJ : Princeton : Princeton University Press.
- Smith, M., Wethington, E., & Zhan, G. (1996). Self-concept clarity and preferred coping styles. *Journal of Personality*, **64**, 407-434.
- Tennen, H., & Herzberger, S. (1987). Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 72-80.
- 徳永侑子・堀内 孝 (2012) 邦訳版自己概念の明確性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **20** (3) pp.93-202
- 徳永侑子・堀内 孝 (2012) 自己概念の明確性および自尊感情が精神的健康に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第21回大会発表論文集

自己概念の明確性および自尊感情が精神的健康状態の変動性に及ぼす影響 徳永 侑子・堀内 孝

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究,
30, 64-68